

村野次郎創刊

香蘭



2024年(令和6年)8月号

第101卷

第8号

通卷1124号

二〇二四年(令和六年)八月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第一〇一卷第八号



香 蘭

2024年(令和6年)8月号
第101巻 第8号 通巻1124号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(108)	石井雅子	表二
近詠十五首 死を見詰む	青山侑市	2
作 品		
一		4
二		24
三		32

推薦香蘭集

香 蘭 集

作品一 十首選(六月号) 渡辺礼比子選		14
作品二・三 十首選(六月号) 千々和久幸選		19
村野次郎への旅(172) 昭和期の「香蘭」(七)	土井紘二郎	23
一頁公論(39) 祖国とは国語	鈴木桂子	30
「香蘭」とともに(10) みにみにびにびに	千々和久幸	31
続・酔風船(8) 孤独ということ	中島由美子	44
エッセイ・自由研究 病と生きた吉野秀雄	近藤純	46
エッセイ・自由研究 「小倉百人一首」丸暗記への挑戦	市川義和	51
新刊紹介『固有名詞の短歌 コレクション1000』	桜井京子	52
焦 点(六月号) 生きづらさと向き合う歌	黒羽・三澤・有馬・西崎	54
七 首 抄(六月号)		55
松沢みどり「春になれば」評(六月号近詠十五首)	伊藤美恵子	55
作 品 評(六月号)		
作品一		56
作品二		58
作品三		60
香蘭集		62

緑 地 帯

関口・中村(美)・小城

明宝研究会第一五〇回 三月例会 最近の五歌集を読む 続編	加藤英彦	64
明宝研究会第一五二回 五月例会 与謝野鉄幹の作品を読む	高嶋憲彦	68
他誌拜見 134	石井雅子	78
歌会及び会合・会員消息・他		86
編集後記・新宿日記		92
表紙絵……山口 蓬春「桃」		表三
目次・緑地帯カット		和田 和雄

石井雅子

柿一つ梢に寒く残りゐて

ふる里の家に母病みにけり

『続 樗風集』

『続 樗風集』のなか昭和十四年の六十六首のなかの小題「過ぎし日より」とした六首の三首目にある歌。先生四十五歳のころ。

先生は大正八年、早稲田大学商学部卒業後、田中家と養子縁組をして実家の籍から離れているが、ふる里を思い、父母、同胞を思う気持ちは断ち難く短歌でも多く詠んでいる。

この一首も三句までの「柿一つ梢に寒く残りゐて」との情景描写が冬に向かう寒々とした心細い思いが感じられ、ふるさとこの母の病を案ずる心情が引き出され、下句と良く呼応している。読む人の心に染み入るような歌となっている。母はいつも息子の健康を思い、強壮剤として野蒜を送ってくれていた。

・ふる里の母送り來し野蒜玉味噌にあへつつまなぶたあつし

「過ぎし日より」

・父の碑のかたへに母の墓新したちつくし思ふわれは他家を継ぎて

「ひがん」

〔『村野次郎全歌集』473頁、続 樗風集』に掲載〕

死を見詰む

青山 侑市

本堂に懸かぐる曼荼羅の諸佛にあの世を觀みむと直ひたに向き合ふ

弔辞には天国がよく出てくるは彼あの世のあるを信じてのことか

落語には地獄はあれど極楽なし阿弥陀の浄土に笑ひは無しか

死に急ぐことはなけれど生き急ぐこともなからむ弥次郎兵衛にて

死しにやまひ病食を絶つての自尊死はひそかなりピング・ウィルならむよ

化野あたしのの念仏寺の墓所はかどころ巡れば浮遊す吾の魂

墓巡り確かめてゆく墓碑銘の死までの経緯を胸に刻みぬ

佐野史郎は敗血症の極まりを故郷松江うみの湖を見て語る

脳と肺、胃の無き遺体で家に着く解剖受諾の村野四郎は

死とふもの前から来ずに後から知らず識らずに忍び寄るらし

同い年の訃報に思はず身を正すこれから先も生きねばならぬ

ひと言随想

この秋で八十八歳

「いつ死んでもよいやうに」との苦言にて身边整理は当然のこと

惚ける前に辞世なるもの書き置かん四季折々にそれぞれ一首

葬式も墓も不要と遺書にしてあとは野となり山となるとも

「ありがとう」この一言が死に際に言へるか否か考へてゐる

この秋で八十八歳になります。一昔前なら大変な長寿と言えましょう。

これまで多くの人の死に会いました。肉親を始め、恩師、同期生、職場の先輩、同僚、歌の先達等々。今でもこれらの方の面影が彷彿といたします。

ことに、去年の四月には長男が病で死に、今年早々、香蘭へ誘ってくれた義姉が亡くなりました。

幸い歳を取つても、耳の遠いのを別にして、いたつて健康ですから、今のところ死への怖れは全く感じません。しかし歳が歳ですから、死神のお呼びが何時来ても可、という心構えはしておきたいのです。

遅かれ早かれ、確実に到来する死というものを、真摯に見詰めることは、今をどう生きるか、に繋がります。その機に臨み、取り乱すことのないように。

四選者の作品

創刊100周年に 平塚 千々と久幸

朝まだき神田明神に詣できつ大事の前のこころ鎮むと
何をどう喋りしものか花束に囲まれいるを長く記憶す

挨拶は何度やつても意のままにならぬを責めて壇を降りきつ
記念事業のすべて終えしが身の軽さ未だ実感出来ずにいたり
「終刊号見据え」て野垂れ死ぬまでを戦う覚悟われにあらんや
明日よりは違った景色の見えくるか眼を凝らす聖橋の上
いくばくかは感傷に落ち通いなれし駿河台の坂下り行く
100周年もわれの祝辞も花束も遙けくなりし妻は知らざる

歪になる 東京 桜井京子

葉桜になる頃までにと思ひしが花の終りはしづかな桜
目覚むれば晴れて五月のよき朝もういいよとふ裡よりのこゑ
白い手紙が送られて来ることもうあらず過ぎたる春の曇りガラスよ
言ひ違ひ聞き違ひはた勘違ひ酔をとるとは歪になること
だんだんと手が掛かるやうになる身体 春夏秋冬恙あらずな
これの世は何でもありて何もなし花舗のピオラ咲きこぼれをり

何につけ褒められるのは嬉しかり歯科医が褒めるわれの歯磨き
疲れよりすこし回復したる朝わたしの虹はまだ見えないが

香蘭百周年 横浜 渡辺 礼比子

聖橋の雨は小止みになりいたり祝賀会場に向かわん朝
香蘭短歌会百周年記念祝賀会 師はシルバーのネクタイ召して
拙歌読み夫の病を案ぜしと来賓さみが声かけたまう

来賓の一真和尚と同郷のよしみに語らう伊豆の山河を

百周年の準備をしつつしばしば見舞いし母逝くひと月まえに
あの世より迎えが来たかと思うまでおかあさんと呼べり死に近き母は
シューマイの種は粘るまで合わすべし くだらぬ喧嘩は見ぬふりすべし
今にしてやさしきことを言うなかれアマゾン河の逆流する春

花を抱えて 鎌倉 高畠 憲子

むらさきの菖蒲ぬらして雨降り香蘭百年よみすることく
静子師の庭より来れるあやめ草ふた年を経て花の咲きたる
香蘭の祝賀に向かひぬ白秋の詠みたるニコライ堂を背にして
香蘭百年、ようこそと声発したる代表の胸にとき色の薔薇
隆三の隆は白秋本名より次郎が付けしとふ秘話の明かさる
『寡黙な鳥』に啼き続けゐる声聴かむ長島勲氏は香蘭のひと
雨上がる お開き見送るホテルマンの笑顔よろしきガーデンパレス
百周年祝賀会より帰路につく分ち合ひたる花を抱へて

作品一 十首選



(六月号作品から)

渡辺 礼比子 選

・老いて死ぬただそれだけの時の間を難しく生き苦しむものか

千々和久幸

簡潔に詠まれていますが、作者の人生哲学の表現された奥の深い作品である。四十年近いビジネスマン生活を終え、またリタイア後は結社の代表を務め、多くの人々と接してきた作者は、人間の愚かさというものをイヤというほど見せつけられてきた。些細なことでも悩み、シンプルに考えればすむところを、わざわざ問題を複雑にし、悩み苦しんでいる人のいかに多いことか。対人関係の縫れ等も、傍からみているとうんざりしてくる。まことに、「老いて死ぬただそれだけ」と考えれば、何事にも、さして深刻になることはない。結句の「ものか」は「……ことよ」の意の終助詞。報われぬ努力を重ねている凡人にとっては、耳の痛い一首である。

・平安朝にしばし遊んで日が暮れて令和の厨にもやしを炒む

高島 憲子

六月号の前後の歌から察するに、「平安朝にしばし遊んで」というのは、明宝研究会における川久保百子氏の和泉式部についての研究発表をさしているらしい。この一首、何とんでも結句が効いている。「もやし」を炒めるという現代の家庭料理の場面を描くことで、

作者は平安から、令和までひとつとびに時間旅行をしてみせる。三句の「日が暮れて」も、二つの異世界を結びつける句として、しっかり機能している。この作者特有のユーモアセンスの光る歌。

・芋虫月、虫の出でくる三月は古い放題に古いゆくものか

石井 雅子

「芋虫月」とは三月の満月のこと、虫がでてくる季節だからこう呼ばれているらしい。上句と下句には意味的には何のつながりもないのだが、上句にこんなナンセンスなフレーズを持ってきたことにより、いささかの老の嘆きを吹き飛ばしてしまっただ点が見事である。作者生来の遊び心の發揮された歌と読んだ。

・コロナ禍を耐へたるおでん屋「山神」に貼り紙ありて店仕舞ひせり

市川 義和

作者は、コロナ禍にあってもがんばるこの店を何度か訪れ、陰ながら応援していた。しかし、コロナが一山超えた（終結したとはいえないまでも）今になって閉店するという。まるで、がんばるだけがんばって力つきたかのように。店を畳むということとは、やはり、そこで一生懸命働いている店主や従業員を応援することもあっただろう。作者にとつてはなんとも残念ではなかったが、主観的な感情は述べられていないが、作者のあたたかい気持ちの伝わる歌。

・アーバンラインと名を変えたれど東武線窓から春の田畑を見せて

江口 絹代

「アーバン」とは「都市の」「都会の」と言う意味であり、東武線は従来の少々泥臭いイメージを返上して「都会線」になったことになる。よくマンション名などの固有名詞に使われるだけあって、「アー

パン」には、何となく垢抜けした響きがある。にも拘わらず周辺の景色が変わったわけではない。車窓からは相変わらず長閑な「春の田畑」が広がっている。作者はこの景を愛しているから、この新しい命名にちよつとした皮肉をいつてみたくなったのだ。「業平橋駅」が「とうきょうスカイツリー駅」に改名されたときにも批判の声が上がったのを覚えているが、この作者も固有名詞をカタカナ語に変える安易な風潮に物申ししているのかもしれない。

・手放せば尚鮮やかに残るらむ亡母と選びし西陣の帯

大井田啓子

昭和に育った女性たちは洋服文化の中で生きながら、娘時代になると親から和服を誂えてもらつた経験のある人が多いのではないだろうか。それが年をとるにつれ、着る機会がめつきり減り、終活を考へ始めると和服をどうするかは、頭の痛い問題となる。西陣織の帯もきつと作者にとつては母との思い出の纏わる宝物であつたらうに、断捨離の一環なのか、手放す決意をした。身を剥がれるような思いではあつたかもしれないが、箆筒に眠らせておくより、手放したほうが鮮やかに記憶に残るだらうというのは、知性派のこの作者らしい発想の転換だ。この一首を得たことで帯も報われたことだらう。

・デコボンの枝を切つたり残したりさながら短歌の推敲に似て

柏原 義清

作者は蜜柑農家の人として働き、長く短歌の研鑽にもいそむ、いわば二足のわらじの生活を続けてきた。短歌の推敲についていえば、欲を出して、あれもいいたいこれもいいたいと盛りだくさんにすればしくじるが、思い切つて言葉を削ると、格段によい歌になる

ということとは私たちがたびたび経験するところである。

・目眩だと思つていれば地震なりわれの目眩は震度三らし

沙 阿羅

作者は病気を抱えており、ときどき目眩を起こす。まただと思つて、静かにしていると、今回は自分の体の変調ではなく、地震であつたという。自分の眩暈を「震度三」と評価しておもしろがっている歌である。心配や不安をユーモアに変えて歌に詠み、心を軽くする、それも短歌の効用のひとつであらう。

・夫が先で良かつたなどとよく言ふよ眞実はひとつ四回思過ぐ

西野美智代

他人を慰める場合には細やかな配慮が要る。人はそれぞれ価値観も感じ方も違うから、自分ではいいことをいったつもりでかえつて相手を傷つけてしまうこともあるのだ。とりわけ作者にとつては、連れ合いとの別離は何物にも代えがたい苦しみだつた。「眞実はひとつ」とはそういうことだらう。「よく言ふよ」という口語表現に相手の無神経な言葉に対する作者の怒りが滲んでいる。

・みどり児を冬のふとんに寝かしたつその母もふわり溶けてゆきたり

満木 好美

ふとんは昼間外に干され、冬の陽をたつぷり吸つてふかふかである。そこに大切なみどり児を寝かせる。児は無心に寝入り、子育て中で疲れの溜まつている若き母も、傍らに横たわつて気持ちよさそうに眠りこんでしまった。それを「ふわり溶けてゆきたり」とした結句が斬新。「冬」「ふとん」「ふわり」など、さりげなく挿入された「ふ」の響きが心地よい。

作品二、三 十首選



(六月号作品から)

千々和 久 幸 選

・新しいスマホにすると決まりたりこれより暫し苦戦余儀なし

小原 裕光

ガラケーからスマホへのステップ・アップ(?) だろうが、「決まりたり」だから、誰かに背中を押されてのことだろう。自分で決めたのなら「決めたるが」となる筈である。それにしても新たな体験に高齢者は当初難儀することは目に見えている。

とは言え昨今は居酒屋だって注文はQRコードの時代。いざれ酒もロボットが飲んでもくれるだろう。記号相手に生きるなんて考えもしなかったが、IT時代にこんなことを言うわたしは古い人間でござんすかねえ。

・始めての胃カメラ控えうきうきとウオッカを飲むコツを知りたく

庄司 健造

「飲む」のは胃カメラかウオッカか、いやその両方を引っかけた暖味な「うきうきと」が話をややこしくした。胃カメラは嫌だが飲むならばウオッカのように飲みたいという飲兵衛の美学だが、読者は一直線には飲み込めなかった。あつさり詠めば「はじめての胃カメ

ラなればうきうきとウオッカをのむ気分^がに待てる(り)だろう。庄司さん、夜中に起き出して、も病院の売店に酒は置いて無いよ。酒が飲みたきや、早く帰って御出で。

・水の辺の青鷺のフोट届きたり拡大すればデンマークは冬

富田 勝子

上句はごく単純に事柄の経過を叙しただけだが、眼目はそこから突如開けてくる下句の光景にある。「拡大すれば」の接続詞が「デンマークは冬」というエキゾチックな気分を引き出し、巧まざる効果を生んだ。転換の妙、というべきか。作者からすれば平熱の歌だろうが、一連には「まひるまの公園は閑か鉄棒にぶら下がる夫をスマホに収む」もあつて、掲出歌がフロックでないことが知れる。

・マネキンが赤いセーター脱いでおり私が着たいと言ったばかりに

中村 陽子

作者の現実と幻視の境目に浮上した作品。マネキンには作者の声はもとより、夢の間の瞬きも見えているのだ。作者の欲求がそのままマネキンの夢をも誘い出したのだ。で、作者は試着しそのセーターを買ったかって? そんなことはどっちだっていい、と作者は言うだろう。作者はこの一瞬の白昼夢に、ヒロインとしてパントマイムを演じているのだから。

詩は現実の模写ではない。詩は作者の中に眠っている夢であり、憧れである。要はそれに言葉を与えることが出来るかどうかだ。

・間引き菜を胡麻和えにして食事終えリングを食べてカンツォーネ聴く

馬場 美信

闊達な作者の夕べのひと時が詠われている。作者からすれば現下

の思いを素直に表現しただけなのだが、世上「一首の中に動詞が四個所」などと勘定したがる読者も居るから困る。だが短歌に法則があるわけではないから気にしないこと。要は四個ゆえに一首が煩いかどうか、である。一個だつて煩く感ずる歌もあるのだ。

煩かろうが賑やかだろろうが、作者にとつては自足の一日の終わりののである。いや昼食か夕食か分からぬではないか、などと理屈を言う暇があったら、今一度松江の方に向かって音読してみることだ。

・反論はせずに言葉を呑込みぬ 雪をかぶれる南天の紅紅

安田 恵子

上、下句が離れて一首を統合している歌。この技法は前衛短歌の時代に流行ったが、今日では個別の作品に溶解され、さほどの珍しさはない。この歌も主意は上句にあつて、下句には一見無関係な情景を対置させて比喩的な効果を狙い、作者の心模様を伝えようとするもの。作者は反論をしようとしたのだが、それを抑制して言葉を呑んでしまったのだ。南天だつて雪のため自己主張が出来ぬ悔しさを抱えているのではないかと、自らを宥めながら。

・娘から彼岸参りの誘い来るそれどころでなし短歌忙し

今井富左子

「短歌ファースト」の人生である。家族もそのことをよく理解しているのだ。「香蘭」には見上げた歌人が居るものと嬉しくなった。どこかにユーモアも匂い、「短歌は二十四時間勤務」の作者である。

一首は締切日と格闘中のものと思われる。視界は短歌一色で「彼岸参り」どころではない、生身の傷だらけの(?)戦いの真つ最中である。この集中力がこの熱く激しい歌を生んだ。

・寒風が桜並木に吹き付けて冬芽の夢を打ち破りいる

小城 勝相

わたし流儀に言えば一連の序歌の趣で、概括的だが丁寧に穩当に詠まれている。「冬芽」は「晩夏から秋にかけて生じ、越冬して春になつて成長する芽。冬芽」(広辞苑)とある。

見所は下句の情景描写にあるが、言葉ほどの激しさを感じないのは、作者の重厚かつ穩当な人生観のしからしめるものだろう。「歌は人なり」を思わせる一首だが、序歌だから本当の勝負はまだ見ぬ第二首以下にある。期して待つべし。

・こは序章はた終章か言ひたきこと未だあるやうに春の雪ふる

澤田久美子

詠いたいののは結句の「春の雪ふる」である。それをこれだけの屈折と陰影をもつて表現してみせた力量に感服した。この作者なら敢えて言うが一、二句で一首、三、四句でさらに一首、合計三首作れるドラマを抱えた歌だ。それを一首に凝縮し、密度濃い作品に仕上げた。冗句をカットすればかくなる事を承知の作者である。

・残りたる親不知一本抜くために関東労災病院に行く

西崎 廣江

大分在住の作者のこの歌をどう読んだものか、その驚きと興味で採った一首。関東労災病院は川崎市にある。だから大分からどう、なぜ行くのだろうと余計な心配をしたのだつた。そのミステリアスな謎が魅力になつている歌。逆に言えば、謎の無い想定内の歌はつまらない、ということになる。さはさりながら、解けない謎は手に余ることも事実。はてさて作者は以て如何となす?

村野次郎への旅（一七二）

昭和期の「香蘭」（七）

「香蘭」昭和二年（一九二七）四月號（第五卷第四號）は、前頁と同じスタイルで四月一日に発刊された。表紙畫及び題字は引き続き北原白秋、編輯兼発行者田中次郎で総頁五十四。本誌定價一部金四拾錢であつた。

目次を見ておくと巻頭の短歌欄は村野次郎、橋本敏夫、清原齋、本間樂寛、冬野木枯、川村浩、柿谷伸、石野正太郎、荒木暢夫、今井嘉雄、深野車之介、杉浦翠子の十二名。次いで本間樂寛のエッセイ「愛しき歌人の群」の自然描寫を挟んで、次の短歌欄に芥子澤新之助、成田憲三、松丸魁一郎、眞島勝郎、横山信吾、佐藤達夫、西村孝、住吉良康、黒岩喬任、日根まもる、若林昇の十一名。前月歌壇合評は杉浦翠子、穂積忠、橋本敏夫、村野次郎。卯月集（短歌）に芦郵敏郎、今福公一など十四名。一人一首評（今井嘉雄、橋本政一）、冬日漫語（成田憲三）、さらに花

千々と久幸

蔭集（短歌）に大貫迪子など十六名。光風集（短歌）に大沢經一郎など十二名。春霞集（短歌）に平沼浄など十八名。香蘭合評會、ろくごう雜記、編輯後記となつてゐる。

さて例によつて巻頭の村野次郎の歌から読んでいこう。

議會傍聴

村野 次郎

①さかしらに罪なき人をおとしゐるその一言は許すべからず

②自がことの悪しきを知らず無暴なるその腕をもて通すといふか

③汝がこころよしと思はば脅すかのともがらにひるむべからず

④車怯にもどよめきの中にまぎれたれど頭大いなる彼にちがひなし

⑤ただしきを阻みわめくは久方の空に向ひて唾はくがごと

⑥まなびやの子にすらおとるともがらにまじはるころわが持たなくに

この一連は「陸軍機密費横領問題」としてセンセーショナルな顛末を辿ることになる政界の闇を歌つたもの。わたしが生まれる以前の事件で、このたびネットの情報で始めて概要を知ることが出来た。

発端は陸軍大将であつた田中義一が一九二五年に政界に転身した際の持参金三〇〇万円の出所を巡る疑惑であつた。帝国議會で田中は神戸の実業家から借りたものと釈明したが、その金が田中が陸軍の機密費を横領したものであるかという疑惑を招いた。

告発を受けた東京地方裁判所検事局は訴えを受理したものの、担当の石田基次席検事の怪死によつて事件の追求は終わった。しかしこのミステリアスな事件は今に多くの謎が残されている。

担当した石田基次席検事の死体は、東海道線大森―蒲田間の鉄橋の下で発見されたが、同日記者会見した吉松検事は「断じて他殺ではなく過失であつた」とした。遺族からは死体の司法解剖を要求されたが東京地裁はこ

れを無視して、その日の内に火葬場に送られたというもの。

以上はわたしがネットで検索した文章を下ラマに翻訳したもので、真偽のほどは保証の限りではない。わたしは敗戦直後に発生した下山事件を想起したが、ともに怪死が介在するところが気になった。

ネットはさらに続けて、この事件を追った松本清張の『昭和史発掘』第一巻、文藝春秋（文春文庫、2006年、新装版）のあることを付記している。

村野先生の作品はそのことに直接触れられてはいないが、以上の事実を知ってしまうといかにも事実の後追いに見える。

むろん先生の興味はそんな下世話（だろろう）などところにはなく、真つ当な議会人としての節操や規範を問題にされたものだ。ただいかんせんさはさりながら、視点の置き方が常識（良識）の範囲を出ないところに不満が残ったのだった。つまり文学作品としての迫力に欠けると思うのは、わたしのネットの知識から影響が邪魔をしているのかも知れない。

さてさてネットに足を取られて足踏みをしてしまったが、定番の前月歌壇作品評を読もう。今月の評者は杉浦翠子、穂積忠、橋本敏夫、村野次郎である。

創作

・みそさざいつと啼き出でぬわが部屋の障子のそとはまだ明けやらず

・日いまだし明けの蒼みをやどしたる障子のそとのみそさざいの聲

わが額にあぶらを覺ゆ寒き夜をもの書き急ぎ書

き終へし時

（翠子）斯ふいふ歌に接すると。若山さんの本

當に觸れたやうな気がして愉快です。氏には

鋭いやうな才のないところに、また静寂さがあり

ます。さきだしたのでせう。二首とも良いお歌と思ひ

ます。しかし、私は（二）のお歌の方を採り

たでせう。嬉し。

（忠）わが額の歌、小生には何等の詩美をも感

ぜられぬ。書き終へし時も説明にすぎると思

ふ。日いまだしの歌あのみそさざいの小刻み

の聲が少しもうまく表現されてゐない。あの

沼津のお宅の事を思ふと、いかにも若山氏の詠まれそうなものとは思ふが……。少しもつた

いない。

ポトナム

・みそらよりながる、雪は夕かけのほのけき

中にきえいりにつ、

・燐寸すりて炭火をおこす暮がたの寂しさに

しも馴れゆかんとす

（翠子）（一）のお歌は、何か特異な感覚に觸

れてるやうですが、どうも私には不可解です

「ながるる雪」は私には不明です。現在の降雪

が暗れんとして、そこに夕日がほのかに射し

て来た景色を詠つたのでせうか。この歌の意

味が了解出来たら面白そうですね。不明ながら

私は光線がちつとも定まらない映畫を見るや

うです。ポトナム調で「歌よみの歌知らずは、

藪医者よりも危い、歌人の群よ命用心」な

どと言はれるのでせう。降参いたします。

（二）のお歌は平凡です。「馴れゆかんとす」

の「ゆかん」が、何かの前提を受けてあるや

うに思はれ、「馴れる」の續きとしての心持と

しては言葉が強過ぎます。「ゆかん」は容りま

せん。「我が馴れんとす」でよいと思ひます。

いかな。

一頁公論

(39)

祖国とは国語

土井紘二郎

数学者の藤原正彦氏に「祖国とは国語」というエッセイ集がある。氏は数学者であると同時に優れたエッセイスト、論客でもある。

私は以前に、「若き数学者のアメリカ」、「遥かなるケンブリッジ」、「国家の品格」等々のエッセイをとて興味深く読んだことがある。なかでもこの「祖国とは国語」は、わが意を得たりという思いであった。

現在の日本は政治、外交、経済、教育等あらゆる面で重大な問題を抱えており、もはや危機的状況にあるという。これは国家の体質が劣化しているということで、国家の体質は国民一人一人の体質の集積であるから、一人一人の体質を形造る教育を立て直す以外に道はない。しかし、これは時間のかかることで、即効薬も起死回生の一手もない。教育を根幹から改善するためには、小学校における国語

こそが本質中の本質であると主張する。なぜ国語か。言語は情報を伝達する道具にとどまらない。人間は言語によって思考する。人間はその語彙を超えて考えたり感じたりすることはできない。母国語の語彙は思考であり情緒であるからだ。

氏はアメリカの大学生が数学はできないのに、理路整然と説得力のある表現をすることに、論理を育てるには国語を学ぶ重要性を説く。国語は論理的思考を育てるのである。

また、現実にくわす怪しげな論理の正当性を見極めるには情緒が大切で、それは生得的にある情緒ではなく、教育により育てられ磨かれた高次の情緒である。日本には素晴らしい小説、詩歌がたくさんある。国語教育でこれらの文学作品を読み、暗誦し胸にしまひ込むことで豊かな情緒が養われる。

かつて、英語第二公用語論というものがある。論になったことがある。日本人全員が実用英語を使いこなせるようにする。刊行物は和英両語で作成。長期的には英語を第二公用語とする方向で議論する。

このときは我ながらあきれた。愚の骨頂だと思つた。

多くの日本人は英語ができればよいと思つているらしい。海外旅行に行つた時とか、外人に会つた時とか、英語ができれば気分がいいのはわかる。またいつとき国際人になつたような気がするのか。真の国際人とは、世界の人々に敬意を払われる人であり、大切なのは伝達手段の英語よりその伝達内容である。いわばその人の教養という人間力であろう。教養とは祖国の歴史、文学、芸術に誇りをもつており、それを堂々と言えることであると思ふ。

最近小学校でも英語を教えるらしい。英語は中学からでよい。小学校では国語、漢字をしつかり叩き込むことが大切である。国語で物事を考え、表現できることが先である。

祖国とは領土ではない。祖国とは国語であるのは、国語の中に祖国を祖国たらしめる文化、伝統、情緒などの大部分が含まれているからである。祖国の最終的アイデンティティーは国語である。

現在の政治家たちは裏金作りに精を出すより、氏の国語教育絶対論を真剣に考えて欲しいものである。

「香蘭」とともに (10) 鈴木 桂子

—みにみにびにびに—

2024年6月1日、大阪本社版の朝日新聞朝刊に、近鉄京都駅に掲出された、然る会社(「広告」)の写真が掲載された。(「広告」には、ひらがな8文字、4文字ずつ横書きで二段に、(「みにみにびにびに」)と大きな字体で、それだけである。同じものが同年5月20日から、神奈川大学、専修大学、静岡大学、関西学院大学、広島大学、北海道大学、立命館大学、埼玉大学、関西大学等の周辺駅に、5月27日には都内の渋谷駅に掲出された。そのユニークさから(「謎の広告」として話題を集めた。掲出したのは、新規採用就職活動サイトOfferBoxを運営するiPlog(大阪市)社である。サイト名でも分かるように、(「広告」)は、就活生をはじめとする多くの学生宛に発信されたものである。

同社のコメントによれば、2025年卒業予定の学生600名を対象に、就活状況に関するアンケート調査を行ったところ、調査時

点で「就職活動中」と回答した500名のうち、就職活動中「不安や緊張を感じる」ことがある/たまにある」と回答した学生が約96%、さらに「不安や緊張を緩和できる方法をとても知りたい/どちらかという知りたい」と答えた学生が81%あったという。その結果を受けてiPlog社は、2025年卒業予定生の採用面接解禁日であり、2026年卒業予定生には夏期インターシップなどの就職活動のスタート日にあたる6月1日に向け、その場で簡単に不安や緊張を緩和し得る言葉を作成し、掲出したという。

(「広告」)作成に際し、同社は「口角が上がることで気持ちが前向きになる」という行動心理学と、「不安、ストレス緩和につながるかわい言葉」という音声学の知見をかけ合わせ、「口におさすだけで前向きになる言葉」を100語以上考案し、関西大学文学部総合人文学科の熊谷学而准教授の「監修のもと、関西大学の学生に「声を出した時、もっとも「前向きになる」言葉」を選んでもらい、「みにみにびにびに」に決定したのでそうだ。

熊谷准教授の解説によると、「みにみにびにびに」の母音の「い」を発音するとき、口角

が上がって笑顔のときと同じ表情を作ることができ、自然と前向きな気持ちになる。また「み(m)」「び(p)」は赤ちゃんが発音しやすい両唇音のため「赤ちゃん」というイメージと結びつき「かわいい」と感じる。「かわいい」と感じると人は笑顔になったり気持ちが高くなったたりする、ということである。

前向きになれる、母音が「い」の言葉。思わず口に出したくなる、音声的にかわいい言葉。ポジティブな言葉。くり返しなど、これらの指摘は、理論的に作歌にも応用できそうに興味深い。コロナ禍を過ぎて新卒者は売り手市場だが、増える対面の場に、うまく話せるかなど不安も増えているらしい。まさに「みにみにびにびに」の効果に期待したいところである。試験とは無縁になった私達も、寂しいとき、苦しいとき、辛いとき、不安なとき、「みにみにびにびに」と唱えてみると、思わぬ効果があるかもしれない。もしかしたら、老若に関係なく多くの人に元気と癒しをもたらしてくれるマホウの言葉になるかもしれない。そう、たかが言葉、されど(「みにみにびにびに」)である。

続・酔風船（8）

千々和 久幸

孤独ということ

「中華人民共和国の建国の父」と言われた毛沢東（1893～1976）は、かつて「人類の最大の課題はメシを食うことだ」と言った。その中国は今や名目GDP（国内総生産）ではアメリカに次ぐ世界第二位の大国になった。かくてメシが食えるようになると、次の課題は「いかに孤独に耐えるか」であろう。

——と2024年度の全国大会の挨拶では、わたしはその場の思いつきを当てずっぽうに喋ってしまったのだった。が、実は孤独・孤立が今やわたしたちの想像を遙かに超えた社会問題になっている現実には皆さんはお気付きだろうか。

イギリスでは2018年に当時のメイ首相が、孤独問題担当国務大臣を世界で始めて任命した。日本でも2024年4月1日に内閣府に担当大臣を司令塔とする孤独・孤立対策推進室が設けられた。実態調査によれば、日本人の約40%が孤独であるという。自分で問題提起をしておきながら、「いかに孤独に耐えるか」が現下の喫緊の課題であることに戦慄さえ覚える始末だ。

話は一転するが、二十数年ぶりに福岡市に住んでいる高校時代の友人が上京してくる。上京などという言葉は今日でこそ敬異くなつたが、わたしたち田舎者には「上京」「入京」「帰省」などという言

葉には、現在も憧憬や郷愁を誘う響きが残っている。

彼の仕事は特殊学級の教師だったが細君を早くに亡くし、リタイア後は専ら海外旅行や音楽会、絵画展、芝居、寄席のほか文化的な催しに足繁く通っていた。彼も一人暮らしたが、その生活は多忙を極めている。わたしは孤独と聞いて反射的に彼を思い出していた。

彼は高校以来の親しい友人の一人で、三年次には御法度の酒を飲んでわたしの家に泊まったこともある。たぶん当時のわたしは物分りの良い聞き上手な友人だった。現在は月に二度、彼の近況を綴った葉書（倉瀬戸通信）が来るから、暮らし向きのおおよそは察しがつく。だが現在のわたしは自分のライフ・ワークを完結させることに手一杯で、昔のように彼の話を聞いてやれるかどうか。

彼が上京する時期には、幸いなことに同期会（菖蒲会）も開かれるが、彼は同期生とは会いたくない、わたしと二人で飲みたいと言う。わたしはその重みが今も少しく鬱陶しい。彼との話がわたしの問題意識と重なるだろうか。わたしはいつかからか、人のために「時間を呉れてやる」のは無駄だと思ふような、つまらぬ人間になってしまった。思い出話、自慢話は聞き飽きたし、酒でも飲む以外に共通の話はない。ま、酔っている間は時計を止めているから、そこでの無駄話は時間外勤務だと割り切つてしまえばすむが……

彼はリタイア後、何をするにも何処へ行くにも常に単独行動だった。まるで孤独を愉しむように。わたしが彼との懐かしさを再確認するだけでは物足りなくなつたのは、孤独を愛しているからではなく、後半生を生き急いでいるせいだろう。お互いに残された時間はそう長くはないのだから。